

報 岩 瀬

発行責任者 熊田順一郎
本号編集責任者 齊藤 俊明

巻頭言 「息子の大切な曲」

天栄村教育委員会教育長職務代理者 桑名 裕昌

息子が私の携帯電話を片手に「お手伝いの時、音楽かけて良い？」とニコニコしながら話しかけてくる。流れてくるのは決まって、YOASOBIの「夜に駆ける」Mrs. GREEN APPLEの「ダンスホール」 旅館をしているので土日は忙しく、食器片付け・洗面台のそうじなど、携帯を胸ポケットに入れ楽しそうに、一生懸命してくれるお手伝いには本当に助かっています。

そんな息子は「ダウン症」です。湯本小学校では息子1人のために特別支援学級を、天栄中学校では支援員の配置をいただきました、村教育委員会のご配慮には感謝しかありません。このような恵まれた環境で学校に通うことが出来た息子は、もともと人懐っこく温和な性格のためか、友達にも恵まれ毎日楽しく登校することができました。

毎日の送迎は息子と水入らずで話が出来た大事な時間でした。クラスメートの女の子に手を振りながら車に乗り込み「僕モテモテなんだ！」とか、「今日は〇〇君がね、先輩って呼んでくれたんだ！」と本当にうれしそうに話すのです。学校への行き渋りも一度も無く、平穏な学校生活を送れました。

特に先生には本当に恵まれたと感じています、担任の先生はどなたも息子のことを正面から受け止め、理解し学習面・生活面でどのようなサポートが必要か一緒に考えてくれました。未だに交流のある先生もあり助けていただいています。

地元の湯本中学校ではなく天栄中学校への区域外通学を決めたのは息子に社会を学ばせたかったことが大きな理由でした、幼稚園からずっと同じ温かい環境で育つことも良かったのかもしれませんが他のことも経験させたかったです。通常学級でも息子は温かく迎えてもらえました。文化祭でクラス対抗の合唱発表前に、クラスメートと輪になる場面を見られたときは涙がでました。息子が1人ダンスを発表しているときの応援の声、友達のダンスを見ているときの息子の笑顔、まさにキラキラした青春の1ページ。中学校の選択は間違えていなかったと夫婦で同じ気持ちになれた幸せな時間でした。このような環境を整えていただいた当時の校長先生を始め諸先生方にはこの場をお借りして感謝申し上げます。



冒頭の曲は文化祭の時、自分と友達がダンスに使った楽曲です。息子にとって大切な曲です。そして今日も「息子の大切な曲」は思い出と一緒に増え続けています。

学校ホームページで大切にしたいこと

須賀川市立西袋第二小学校 三浦 康夫

西袋第二小学校では、主に校長がホームページの作成を担当しています。一日三本を目安に記事を書きたいと考えていますが、なかなか話題が見つからない日は本当に苦労します。「似たような記事、前にも載せたなあ・・・」と思いながら書いていることも、よくあります。

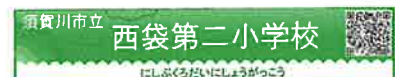
ホームページでの情報発信については、私が前任校の安積第一小学校でお仕えした 山本 浩校長先生（元須賀川市教育委員会 管理主事）の実践されていたことを参考にしています。山本校長先生は、毎日欠かさず通常学級18クラス、特別支援学級5クラスを回り、休み時間は必ず外に出て子どもたちと遊びながら、子どもたちの輝いた瞬間をカメラに収めていらっしゃいました。そして、それをその日のうちに必ずホームページで紹介していらっしゃいました。特に子どもたちの「普段の様子」にこだわっておられた印象があります。

なぜそんなに熱心にホームページに取り組むのか、実は直接お聞きしたことはありません。しかし、いろいろ課題のあった学校だったので、「でも、子どもたちはこんなに頑張っていますよ」「子どもたちの表情はこんなに輝いていますよ」ということを、ホームページを通して訴えたかったのではないかと推察しています。実際、ホームページは保護者に大変好評でした。

山本校長先生にはとても及びませんが、私も「西袋第二小学校のよさ」をできるだけ発信したいと考えています。私の場合、特に以下の目的を持ってホームページの作成に取り組んでいます。

- ① 保護者への発信：普段、実際に学校でどのようなことが行われているのかより具体的に保護者にお知らせする。特に出張で家を不在にするの多い保護者の方から「子どもの様子がよくわかってすごく安心できます」と言っていたときには、うれしかったです。
- ② 地域への発信：地域の方々に今の学校のことを知っていただく。伝統的に地域とのつながりの強い学校でしたが、最近はそのつながりが薄れてきたように感じています。少しでも学校への関心を高められればと思っています。
- ③ 児童への発信：自分たちの活動の意義と成果を実感できるようにする。子どもたちはホームページをよく見ている、「校長先生、昨日〇〇載せてくれてありがとうございます。」とってくれることがあります。紹介されている自分の姿が、自信につながればと思っています。
- ④ 教職員への発信：児童への発信と同じように、自分たちの実践している教育活動の意義と成果を感じることができるようになる。子どもの成長の様子を紹介することが、それを指導している先生方の達成感ややる気にもつながるのではないかと考えています。

他にも、実は来年度の新入生の保護者にぜひ見ていただきたいと強く願っています。本校では、実際には本校学区に在住しているにもかかわらず、小規模校への不安からか他の学校に入学してしまう子どもが多くいます。「小規模校でも大丈夫。しっかりやっていますよ！」ということをぜひホームページを通して知っていただき、安心して本校に入学してほしいなあと思っています。



本校では保護者に掲載の許可はいただいておりますが、個人情報に厳しい今の時代、SNSに子どもの写真を載せること自体どうなのか、私自身迷っている部分もあります。時代の流れや保護者のニーズも考慮しながら、これからも「自校を紹介したり、地域や保護者へ情報を提供したりすることで、学校を理解していただき、自校の教育活動をより活性化させる」学校ホームページを目指していきたいと考えています。

「須賀川市立第四小学校」

須賀川市立柏城小学校長 緑川 喜久

柏城小は、旧滑川小を現在の地に移転させ昭和57年に創立しました。今年で創立43周年です。前身の旧滑川小学校からは150周年の記念の年を迎えました。

今年度から柏城小に異動させていただき、この学校名はいったいどこからきているのだろうか、地域の住所には「柏城」という地名がなく、不思議に思っていたのですが、5月の学校評議員会で早々と柏城地区のことを教えていただく機会を得ることができました。地域の歴史を知るには、やはり地元の人に教えていただくことが一番だと感じる機会となりました。

柏城という学校名は、学校の敷地にはその昔、「柏木城」というお城があり、そこから命名されたそうです。「第四小学校」という案もあったのですが、須賀川は第三小学校までとの教育委員会の方針があったようで、採用されませんでした。そういえば、前任校の阿武隈小も旧江持小を移転させて創立し、そこでも「第四小学校」という案があったのを思い出しました。須賀川の幻の「第四小学校」に2校続けて勤務することになったことがわかりました。

もう一つ教えていただいたのは、校歌に書かれている「板滑」「四郡一声」という言葉についてです。

まず「板滑」についてですが、学校のすぐそばには、「滑川」という川がありますが、このあたりの川の川底は板状の平らな岩盤でできており、とても滑りやすくなっているそうです。昔々その昔、日本武尊が大和政権として全国を統一すべく須賀川近辺に出陣し、滑川を馬で渡ろうとした時に馬が足を滑らせて転んでしまったという言い伝えがあるくらいです。そんな滑りやすい川底のことを「板滑」と表現したのではないかということでした。

また、「四郡一声」については、滑川地区は、旧岩瀬郡の北のはずれにあり、南東に阿武隈川を越えると石川郡（小塩江地区は町村合併前は石川郡小塩江村）、また、東には旧田村郡（守山地区は町村合併前は田村郡守山町）、北には旧安積郡（郡山市安積町）があり、本校の前身である滑川小から一声発すると四つの郡に声が届く地域であるという意味だそうです。校歌に書かれている歌詞に自分たちの地域の特徴がわかりやすく表現されていました。昨年の校長会報「岩瀬」でも書きましたが、「校歌」を考えることは、地域を知ることでもありとても大切なことなのだと改めて感じました。

次は、柏城小の学区には滑川神社があります。歴史のある神社のようで、ぜひ、宮司さんから話を聞いてみたいなあとお機会をうかがっているところです。

柏城小学校歌
作曲 石井 亘
作詞 蓬田ヨウ
阿武隈川に板滑見えて
四郡一声 岩瀬が丘は
信義友情学びのしるし
努めよ 柏城小学校

梓衝神社太鼓獅子

須賀川市立長沼東小学校 岩井 章

本校の学区内にある梓衝神社。その歴史はとても古く、平安時代の延喜式神名帳にも掲載されています。

奈良時代の養老2年(712年)に、常陸国(現在の茨城県)に土着していた豪族が鹿島神宮より勧請したのが起源とされる。平安時代の弘仁12年(821年)、境内地から「神鋒」が出現したので鹿島大明神の依り代として祀るようになっていく。また、『延喜式』の神名帳にも記載された。天喜5年(1057年)には、前九年の役の際の源頼義が戦勝祈願を行い、改めて鹿島神宮を勧請合祀し、梓衝鹿島大明神と呼ばれるようになった。慶長2年(1597年)には火災によって社殿が焼失したが、慶安元年(1648年)に白河藩主の榊原忠次によって再建建立された。

[Wikipediaより抜粋]

梓衝神社は、この地域一帯の総鎮守として人々の信仰を集めています。また、この梓衝神社で旧暦の閏年10月1日に行われる祭事が「梓衝神社太鼓獅子」です。須賀川市の重要無形文化財に指定されており、地区の男性らが化粧し衣装などを身に付け、踊りながら太鼓を叩いて本殿に奉納します。昨年は、本校の児童や長沼中の生徒も参加しました。地域の伝統ある獅子神楽として、長く受け継がれてきています。

本校では、この歴史ある「梓衝神社太鼓獅子」をアレンジしたものを、鼓笛隊や合奏祭の演奏曲として発表しています。現代の楽曲とは曲想が異なるため、多くの学校が演奏している中でも、目を引くものとなっているようです。

保護者や地域の方々には、この曲を演奏していることに、大変喜んでくださっています。「とても良かったよ!」と声をかけてくださる方も多く、おらが地域のシンボルとして、誇りにも似た感情を持っているのかもしれませんが、子どもたちが「梓衝神社太鼓獅子」を演奏するたびに、学校と地域とのつながりがより一層強くなっていくのを感じます。

ただ、練習に時間と手間がかかり、学級担任や子どもたちへの負担がかかっているのが現状です。校長として、いかに負担を減らしながら「梓衝神社太鼓獅子」を続けていくことができるかが課題です。次年度は、カリキュラムマネジメントを工夫して、練習の時間を確保していけるように計画したいと考えています。

地域の方々の心のよりどころとなっている梓衝神社。その歴史と伝統を感じながら学校生活を送れることは、子どもたちにとっても幸せなことです。

これからも「梓衝神社太鼓獅子」の演奏を続けていくことで、地域と学校とのつながりを深めていきたいと思えます。



「職員の和」を大切にした学校経営

鏡石町立第二小学校長 水沼 栄寿

教室同様、職員室にも様々な個性を持った人間がともに生活をしている。敏感に反応しすぐに行動を起こす者、普段はおとなしいが胸に熱い心を持っている者、経験を重ね常に落ち着き冷静に判断できる者、中にはまだ自分が確立できず周りの先輩に頼っている者など、実に様々な人間が「教育」に携わっている。

さて、これほど個性にあふれた教職員を掌握し「子どもたちの健やかな成長」という目標に向かって、協働することができるのであろうか。「それが校長の仕事だろう！」と言われそうだが、はなはだ自信がない。

ある日の出来事を紹介する。鏡石町恒例の「秋のオランダ祭り」では毎年子どもたちが秋の交通安全鼓笛パレードを披露している。特に、本校は全校生による鼓笛パレードだ。ところが祭り当日、天候がはっきりしない。小雨が降ったりやんだり、判断泣かせの天気である。子どもたちは体育館で最後の練習に励んでいた。しかし、そのとき急に雨脚が強まり、実行委員会事務局は「鼓笛パレード中止」の判断をした。

「さあ困ったぞ。中止ということで、このまま子どもたちを下校させるか、今までのこの日のために練習してきたのにそれでいいのか、それとも保護者だけに発表の場を設けるか。場所は？時間は？限られた時間でいろいろ決めなくては。どうする？」

はたと思いついたのが「教職員に任せてみよう！」体育館で指導していた教職員を至急用具室に集め、早速どうするか聞いてみた。

急遽保護者へ発表をするにはいろいろ問題があって難しいのではないか、という意見が出た。難しい理由も理解できた。その場の雰囲気はこのまま下校させることに傾いていた。しばらく沈黙が続く。私がそれでいいのか確認しようとしたとき、ある職員がぼそっとつぶやいた。

「発表の場を設けたほうがいいではないか。」 別な職員も続く。

「1, 2年生をステージに上げればスペースが生まれるのでは。」

この後、せきを切ったように一気に校内発表会に向けての段取りが進む。時間設定は、保護者への連絡は、駐車場は、・・・はじめの否定的な雰囲気は影を潜め、一気に前向きな意見に傾いた。この間わずか5分程度。教員の力を結集するとすごい力を発揮するんだなあ、と改めて感じた。私は「オランダ祭りオープニングセレモニー」に出席する都合上、実際の場面は目にしていない。目にはしていないが、どんな様子だったかは想像に難くない。

帰校するなり職員に声をかけられた。「校長先生！やっぱり発表の場があったよかったです。保護者の方も喜んでいました。」(詳細は本校HPで)こんなにうまくいくことはめったにないが・・・。

学校唱歌「夏の思い出」をリアルに体験

天栄村立湯本小学校 柳沼 信之

昨年12月の教育課程編成の頃、5年生が「尾瀬に行ってみよう」と要望を伝えてきました。先生方と広大な湿原や植生を観察するには適切な学習環境だと話し合い、尾瀬学習を教育課程に組み入れました。

年度初めの保護者会で「今年度は、尾瀬に泊まり、森林環境学習を行います。」と説明し、保護者の方からは了承をいただくことができました。

さて、尾瀬に行く前に、児童の体力を見極めなければなりません。天栄村主催の「二岐山山開き登山」に、今年は2年生女兒がチャレンジしました。急な坂を上りも下りもひよいひよいと歩く姿を見て、「これなら大丈夫」と確信しました。



尾瀬沼近辺 東北以北最高峰(燧ヶ岳 2356m)と満開のニッコウキスゲに囲まれて、パシャリ

「夏の思い出」

作詞：江間章子

作曲：中田喜直

〱 夏が来れば 思い出す
はらかな尾瀬 とおい空
霧のなかに うかびくる
やさしい影 野の小路(こみち)
水芭蕉の花が 咲いている
夢見て咲いている水のほとり
石楠花(しゃくなげ)色に たそがれる
はらかな尾瀬 遠い空



福島県の縁にある尾瀬ヶ原見晴「弥四郎小屋」に1泊。2日目は、裏燧林道を歩いて戻ります。

事前学習で、私から「夏の思い出」を歌って欲しいことを伝えました。この歌は、文化庁と日本PTA全国協議会により「日本の歌百選」に選定されているものです。爽やかなメロディと美しい歌詞が児童だけでなく3人の幼稚園児の心にも刺さったようで、口ずさむ子どもたちの姿が見られました。

7月10日(水)、11日(木)、尾瀬自然学習のスタートです。児童2名と校長・教頭・2人の担任に加え、地域の植物専門家2人(うち1人は、福島県尾瀬保護調査会会員)と大変心強い方々にも同行していただくことができました。燧ヶ岳を周回する約20kmを2日かけて歩きました。

【1日目】 御池駐車場 → 沼山休憩所 → 沼山峠 → 大江湿原 → 尾瀬沼 → 見晴(泊)

【2日目】 見晴 → 平滑ノ滝 → (裏燧林道) → 兎田代 → 横田代 → 御池駐車場

長い道のりの途中、子どもたちは「夏の思い出」を歌いました。時折、替え歌にしてその時の気持ちや疲れたことを訴えることもありました。横田代に差し掛かった時、「霧のなかにうかびくる やさしい影 野の小路」そのままの光景が現れました。白いワタスゲの花もいっぱい広がっています。

「きれい 歌の通りだね」「幻想的な景色だ」「天国の中を歩いているようだね」

ここまで来たからこそ見る事ができたこの景色と、仲間たちの笑顔を忘れることはないでしょう。

学力・学校を考える日々

須賀川市立西袋中学校 面川 祐哉

新任校長とし赴任し、約半年が経過しましたが、思うようにいかないことばかりです。先日の現職教育委員会の中で、授業について話をした際に、「学力とは？」という話題になりました。簡単に答えはできませんでしたが、その時ふと昔を思い出しました。

「ジ・シ・ザ、ペン」というせりふは、ドリフターズのコントでも使われましたが、私の世代においては、英語の授業の初期段階に習う英文として認識されていました。

当時のことはおぼろげにしか覚えていませんが、This is a ～.という文を、英語しか理解できない相手に対して、どういった場面で使用されるかなど、当時は全く考えもせず、ただ単に暗記をしたり、目的語の部分を換えて練習したりしていたと思います。

他にも、I am a boy.などの英文は、LGBTQ が叫ばれ、また男女共に化粧をする現代であればあり得なくもないですが、当時こういった英文を外国人に伝えたとしたら、「こいつは一体何を意図してるんだ？」と、怪しく思われたかもしれません。

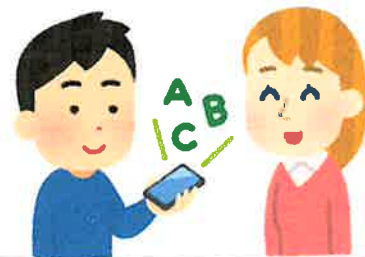
あれから40年ほど経過し、英語の教科書や授業のスタイルも大きく変わりました。ALT が導入され、生の英語や文化を指導してもらえる機会も増えました。しかし、英語について「学力とは？」という問いには、未だに何と答えてよいか分かりません。

英語の教師として、ずっと抱いていたジレンマでもあります。新採用教員として英語を教えている頃から、一部の生徒ではありますが、いつの世代も定番のように言われた言葉が、ずっと頭から離れませんでした。S「何で英語を勉強すんの？」S「俺、一生外国には行かねえし」等。当時も、もちろんT「入試があるからだよ」などと答えるはずもなく、T「勉強するということは、頭の容量を大きくすることなんだよ」とか T「異文化を知ることは…」などと自分ながらを考え、正解かどうか分からないまま答えていました。T「では、英語を使わない世界を体験してみようか」と無茶な問題を出し、T「自転車に乗るときにかぶるものは？」S「ヘル…、いや、安全帽子！」など、ふざけたやり取りをしてお茶を濁したことを覚えています。

現在、外国人と触れあう機会やPCなどで多くの英語に触れる機会が増えており、以前の「英語を勉強しない理由」は薄れてきたものの、AI等の発達により、以前とは違った理由で、英語を学習する意味が問い直されているように思います。アプリを使えば、どの国の言語であっても瞬時に翻訳が可能な時代。これからの時代を生きる子どもたちに、「なんで英語を勉強すんの？」と聞かれたら…。はたして子どもたちが納得できる答えができるだろうか。考えてしまいます。

時代の変化により、様々なことを見つめ直す必要があると実感しています。

「学力とは？」「学校とは？」を考え続ける毎日です。



長沼まつり FINAL

須賀川市立長沼中学校長 関場 俊宏

この度、長沼の伝統行事である長沼まつりの FINAL に、私たちの中学校が参加できたことに、深い感慨を覚えています。まつりの歴史に終止符が打たれるこの特別な機会に生徒たちと共に立ち会い、地域の皆様と一緒にその瞬間を共有できたことは、私たち教育者にとっても、大きな意味をもつものでした。

長沼まつりは、地域の誇りであり、長い年月をかけて脈々と受け継がれてきた文化の象徴です。そのまつりが終わりを迎えるにあたり、私たちの生徒がその一部として参加し、地域の一員として歴史のページに加わることができたことは、彼らにとっても忘れられない経験となったことでしょう。参加するまでの準備期間、生徒たちはまつりの意義や地域の歴史を学び、時には困難に直面しながらも、協力し合いながら乗り越えてきました。それは、単なる体験活動にとどまらず、彼らの人間性を育む大切なプロセスだったと思います。



まつり当日、生徒たちの表情には、これまでの努力を披露する喜びと、地域の方々と共に一体となる誇りが浮かんでいました。地域住民や観客の方々の温かい声援に包まれながら、彼らは真剣な眼差しで自分の役割を全うし、まつりを盛り上げるために全力を尽くしました。その姿は、若いながらも地域を支える責任感を感じ取っているようで、教師として大いに感動を覚えました。



特に印象に残ったのは、生徒たちがこのまつりを通して学んだ「感謝」と「つながり」の大切さです。彼らは、まつりの準備を通じて仲間と協力し合い、地域の方々から多くの支えを受けながら、自分たちが地域の一員であることを実感しました。これまで当たり前のように感じていた日常が、実は多くの人々の努力や思いやりによって成り立っていることに気づき、自然と感謝の気持ちが芽生えていったのです。こうした気づきは、今後彼らが成長していく中で、必ず大きな財産となっていくことでしょう。

また、今回の FINAL は、私たち大人にとっても忘れがたい瞬間でした。地域の伝統がこのように終わりを迎える中で、私たちはその重みを改めて感じ、同時に次世代に何を残し、どう継承していくべきかを深く考える機会となりました。長沼まつりは終わりを迎えますが、その精神は決して消えることなく、私たちの心に生き続け、生徒たちの中にも未来を照らす光として残っていくことでしょう。

最後になりますが、このような貴重な経験を生徒たちに与えてくださった地域の皆様、そして日々彼らを支えてくださった保護者の皆様に、心より感謝申し上げます。私たちは、これからも地域との強い結びつきを大切にしながら、生徒たちと共に未来に向かって歩んでいきたいと思っています。この FINAL が、彼らにとっても、地域にとっても、そして私たち教職員にとっても新たな一歩となることを願っています。

汝 何の為に 其処に在り也

天栄村立天栄中学校長 市川 知広

4月に天栄中学校に赴任して、あっという間に半年が過ぎようとしています。初めての岩瀬地区での勤務。合わせて10年ぶりに中学校現場に戻り、右も左も分からず、浦島太郎状態でした。そのような中、学校経営について、校長先生方の考えや助言を「生の声」として頂くことができ、本当に感謝しております。

この半年の間、「汝 何の為に 其処に在り也 (なんじ なんのために そこにありや)」という言葉は何度、思い出したことか数えきれません。この言葉は、学校現場を離れ、教育行政に身を置いていたときに上司から教えられたものです。現代風に言い換えると「あなたは、何のためにそこにいるのですか」となります。改めてこのように問いかれると、自分自身ドキッとしてしまいます。

この言葉をインターネットで調べてみると、秋田県内の高校で校長を務めた鈴木健次郎先生が米国の大学教授の言葉を引用し、入学式や卒業式のたびに生徒に投げかけた言葉であることが分かりました。さらに調べを進めると、鈴木健次郎校長が秋田高校を去るときの演説を見付けました。

私は、これからの諸君に望みたいことは、今の民主主義というものは、ともすれば、外部の権力に対抗する抵抗として考えられますけれども、本当の民主主義とは、自らの内心にある邪念・欲望に打ち克つことでもあります。

その自らの内心にある邪念・欲望に打ち克ってはじめて、本当の意味の民主主義というものが確立されるのであります。

そういう意味において、これからも、生徒諸君は、一人一人、自らの邪念・欲望に克って、皆と協力のできる学園を作っていただきたいと思うのであります。

私は秋高を愛する、それが故にまた再びここに、諸君に入学式に際して述べた同じ言葉を繰り返して、お別れの言葉にいたしたい。

『汝何の為に其処に在り也』

この言葉にはっきり断言のできる生徒一人一人の毎日の生活であって欲しいのであります。

「自分は何を成すために天栄中学校長としてここにいるのか」を常に自問自答し、自分の存在意義・存在理由を胸を張って答えることのできる毎日を過ごすと共に、「私は天栄中を愛する。」と心から言える校長になりたいと思います。



「感謝に生きる」

須賀川市立義務教育学校稲田学園校長 田中 朗裕

今年の4月1日、本校の校長室にたくさんのお花が届きました。今まで私がお世話になった方々からでした。新任校長として期待もありましたが、大きな不安を抱えて着任した私にとって、机に並べられたお花を見ていると、お世話になった方が一緒に校長室にいてくれるようで、心も落ち着きましたし、守っていただいているような気になり、とても心強かったのを覚えています。同時に、自分がどれだけ応援されていたかも実感することができ、決意を新たにした日でもありました。

自分自身の人生を振り返ったとき、真っ先に思い浮かぶ言葉が「感謝」です。大学卒業後、講師をしていた勿来二中に始まり、新採用教員として赴任した郡山一中、その後の大玉中、湯本中、郡山六中、郡山三中、常葉中まで、とにかく私は、「人」に恵まれていたと思います。たくさんの方々に出会ったおかげで、本当に多くの学びや気づき、経験をさせていただき、成長させていただきました。

先輩の先生方からは、教育者として子どもの成長に関わることができる楽しさや難しさ、責任の重さ、そしてやりがい、部活動の指導者としては、子どもたちの人生でわずか2年あまりという短いけれど濃密な期間に関わることの意味や重み、仕事以外の面での生き方など、本当にたくさんのことを教えていただき、導いていただきました。

また、保護者にもたくさん助けられました。部活動の保護者会で、「田中先生に文句がある人は、俺を倒してから行け！」と言って、私を守ってくれた人もいました。きっと多くの苦情があったのだと思いますが…。親が我が子愛する親の気持ちを知り、優しくなれましたし、保護者と「子どもの成長を願う同志」として全力になれた経験は、とても貴重でした。

そして何より、私が関わった子どもたちからは、多くのことを学び、成長させてもらいました。「本気で生きること」を自分の命をかけて教えてくれた生徒もいました。病気で自分の命が明日尽きるかもしれないという状況の子どもを励ましたとき、逆に励まされたことは忘れられないことであり、今も私を支えてくれています。「目標に向かって本気でがんばる姿」、「諦めず何度も挑戦する姿」、「私の想像をはるかに超えて成長する姿」など、出会ったすべての子どものもつ力や可能性の大きさにはいつも驚かされました。

自分がこれまで出会った方々からいただいた「恩」の大きさを感じれば、感じるほど、どうやって恩返しをすればよいかわからなくなりますが、「感謝」を忘れず、目の前の大切な人のために、本気で生きることが、少しでも恩返しにつながると思っています。

私は、人と人との出会いには全て意味があり、その証として、出会った人たちの心の中に「足跡」を残せるように生きていきたいと思ってきました。これまで私がいただいた「恩」を、「足跡」に変えながら、次の大切な人につなげるために、これからも「感謝に生きる」ことができる自分でいたいと思います。

